

山手

東京新聞

◆中日新聞東京本社
東京都千代田区内幸町二丁目1番4号
〒100-8505 電話 03(6910)2211
さよつり予想 (区内)

「笑いは最高の抗がん剤」

「笑いと希望と勇氣」を合言葉に、がんを体験した人とその家族だけを全国から招く「いのちの落語独演会」が二十日、江東区白河の深川江戸資料館小劇場で開かれた。主宰は自らも闘病経験のある、いのちの落語家樋口強さん(六三)＝高座名・一合庵小風＝と妻の加代子さん(六二)。二〇〇一年から毎年開催し今年で十五回目、招待者は延べ五千人を数える。

(川瀬真人)



招待者 延べ5000人に

樋口さんは大手繊維メーカーに勤務していた四十三歳の時、人間ドックで肺に影が見つかった。精密検査の結果、三年生存率が当時5%の小細胞がんと診断された。手術と壮絶な抗がん剤治療。医師から「生存率のデータがない」と言われた五年を越え、大学時代の落語研究会や、就職後も続けた社会人落語の経験を生かし、年一回の「いのちの落語」を始めた。「笑いは最高の抗がん剤」「生きてるだけで金メダル」と高座から呼び掛け、経験者と家族だからこそ分かり合える笑いと涙のひとときをこへ



「いのちの落語」を披露する樋口強さん＝江東区で

り出してきた。独演会は入場無料で、開催費用はすべて樋口さんが負担している。「五、六年先のことは分からないが、来年の開催は招待者にお約束しましょう。来年の自分に会えるように。そうして気が付いたら十五年がたっています」と樋口さん。この日は親交の深い古典落

樋口強さん「いのちの落語」15回目 江東

語の三遊亭円龍師匠の特別出演や、家族の悩みやつらさを共有する人気コーナー「前を歩く人たち」など六演目があつた。
埼玉県三郷市から来た米玉利けい子さん(六三)は、二年ほど前に膵臓がんを発病し余命半年から一年と宣告された。独演会には二回目の参加。「昨年は自分も不安定で、あまり笑えなかった。今年はとても笑えました」と笑顔を見せた。
千葉市の渡邊慎介さん(四七)は悪性リンパ腫にかかり約五年半。「がん患者、経験者、その家族ばかりなので安心感があります。元気になれる」と話す。
最後は恒例の「決意の三本締め」。円龍師匠の音頭に合わせ、二百五十席の会場を埋めた人たちが一斉に手拍子。来年も、ここ深川でお会いしましょう。樋口さんの舞台上の大きな声で幕を閉じた。